

「全国学力・学習状況調査」平均正答率東京都との差				「江戸川区学力調査」平均正答率全国との差						
学年	第3学年			学年	第1学年			第2学年		
年度	国語	数学	合計	年度	国語	数学	英語	国語	数学	英語
令和12年度の目標				令和12年度の目標						
令和11年度の目標				令和11年度の目標						
令和10年度の目標				令和10年度の目標						
令和9年度の目標				令和9年度の目標						
令和8年度の目標	+8.0	+15.0	+23.0	令和8年度の目標	+7.0	+21.0	+14.5	+7.0	+22.5	+18.0
令和7年度の結果	+7.7	+14.7	+22.4	令和7年度の結果	+6.9	+20.8	+14.2	+6.6	+22.1	+17.6
令和6年度の結果	+8.9	+11.5	+20.4	令和6年度の結果	+5.6	+18.4	+16.3	+5.7	+17.9	+17.6
令和5年度の結果	+10.2	+13	+23.2	令和5年度の結果						

年度	令和7年度	令和8年度	
内容	成果と課題	目標 目標達成に向けた取組	
学校全体	<p>【成果】 比較的落ち着いた学習に取り組み、学習の大切さを理解している生徒が多い。学校の教育活動に協力的な家庭も多く、学習環境が整っている。生徒の意識調査からも学習に関して肯定的回答が多い。</p> <p>【課題】 指示された課題はきちんと取り組みが、自由度の高い課題に関しては二の足を踏み、解き方よりも「その問題の正解」を求めるといった傾向があり、より高みを目指す学習の姿勢を身に付けることが求められる。</p>	<p>正解を求めることも大切ではあるが、そこに至るまでの過程、物事の本質をとらえることができる姿勢の醸成を目指す。深く考え、義務ではなく学びの楽しさを実感し、生涯にわたって学ぶことのできる「学びの基礎」となるものを身に付けることを目標とする。</p>	<p>即時性の高い課題だけでなく、自分の課題を見つけ、学ぶことができる探求的な課題を設定する。読書科の探求学習など、個々によって課題の設定や課題解決へのアプローチが違う学びを経験することによって、じっくりと取り組むことのできる課題設定をする。各教科の授業においても解答をすくなく与えるのではなく、正解への過程を意識した課題設定をするなど、個々に応じた働きかけをする。</p>
第1学年	<p>【成果】 国語は教科総合で6.9ポイント、基礎分野は6.2ポイント、応用分野は11.5ポイント全国平均を上回っていた。特に「知識・技能」の観点では全国平均との差は3.9ポイントだが「思考・判断・表現」の観点では9.3ポイントに差が開いていることから、既存の知識を活用する力が高いことがわかる。</p> <p>英語は教科総合で14.2ポイント、基礎11.9ポイント、応用20.0ポイント、数学は教科総合で20.8ポイント、基礎では20.8ポイント、応用では21.0ポイント同様に全国平均を上回っていた。この2教科に関しては「知識・技能」の観点で全国平均を大きく上回っていることから、知識の定着が結果につながっていることが読み取れる</p> <p>【課題】 全教科において右寄りの正規分布を呈し、どの分野においても全国平均を大きく上回っているものの、国語・英語共に「聞くこと」の領域が「書くこと」「読むこと」の領域に比べて低い。文字を読み、時間をかけて理解する力は高いがその場で聞いたことを理解する即興性の能力の伸長が課題と思われる。</p>	<p>知識の習得に向けて地道に努力する姿勢を身に付け生涯にわたる学習者としての資質・基盤を築く。基礎学力として、読んだり聞いたりしたことを正しく理解する力、基本的な計算能力、整った字形で正しく文字を書き、適切な表現を用いて文章で表現できる力の定着を図る。</p> <p>昨年度の江戸川区学力調査の結果を踏まえ、知識の習得だけでなく、即興性の能力が求められる「聞く力」を高める。特に、言語文化、情報、言葉など、机上の知識だけでなく生活力ともいえる力の定着を図る。</p> <p>どの教科においても最終的に必要とされる言語運用能力を高める。</p>	<p>授業規律の徹底を図る。スモールステップに分けた課題設定により、学習したことがわかる喜びや達成感を味わわせることで、より深く、より多くを学びたいという学習意欲につながる。</p> <p>学び得た知識が生活や集団をより向上させるということを学習活動だけでなく学校生活を通じて実感させるような活動を多用し、生徒の自己肯定感や自己有用感を高める。</p> <p>朝読書の徹底、よむYOMUワークシートなど、言語の知識や読解力を高める活動を大切に。また、学習活動において発表やグループ活動など、自分の知識を言語化して伝え合うことのできる活動を持つことで、言語運用能力の伸長をはかることにより、問題文を読んだときに何を問われているのかを理解させる。記述問題に耐える学力や、国語のみでなく数学の文章題の理解力などにもつなげる。</p>
第2学年	<p>【成果】 国語は全国平均+6.6 区平均+7.9 数学は全国平均+22.1 区平均+19.3 英語は全国平均+17.6 区平均+14.8 ポイント上回っていた。三教科のバランスグラフもばらつきはなく、点数は安定している。国語は「話すこと・聞くこと」を問う問題の点数が最も高く、数学と英語は「知識・技能」を問う問題の点数が最も高かった。どの教科も選択式の問題の正答率が最も高く、数学では正答率86%となった。昨年度受検した江戸川区学力調査と比較しても、すべての教科で点数と区・全国平均の差が伸びていたため、生徒の学習が定着していることがわかる。</p> <p>【課題】 どの教科も「記述式」の問題に対する正答率が低い傾向にある。国語では、「選択式・短答式」の正答率が75%を上回るのに対し、記述式の正答率は、区・全国の平均は超えているものの、44%に留まった。英語・数学でも「記述式」のみ正答率が50%程度に留まっており、外国籍の生徒の生徒の多さがだけが理由とは言えない状況にある。記述式の問題に対する反復練習や、取り組み方を学ぶ機会を授業内で増やしていくと良い。</p>	<p>主体的に学び、粘り強く課題に取り組む態度を育て、国語・数学・英語で定着している基礎的・基本的な学力を維持・向上させる。</p> <p>国語は、選択問題の正答率を上げるために、消去法などの訓練を行い、問題に解き慣れさせる。また、記述式問題に対応できるよう、自分の考えや解き方を筋道立てて表現する力を育成する。</p> <p>数学は、各単元ごとの正答率を分析をすと、平面図形で80.9%、円、球で72.0%、空間図形93.6%であった。似たような単元での正答率のばらつきが目立つため、令和8年度は80%以上を目指す。</p> <p>国語・英語ともに言語活用能力を高め、学習した知識・技能を活用し、説明・表現につなげる力を伸ばす。</p>	<p>国語では、記述問題に対する苦手意識を払拭するために授業で短い記述問題に取り組む機会を増やしていく。全国学調の過去問題を令和元年にまで遡って取り組むことで、出題傾向や解き方の方法を掴み、問題に慣れるようにすると同時に解答の書き方やポイントを確認する。</p> <p>数学では、問題文を飛ばして読んでしまい、条件を考えずに取り組んだ結果、誤答が目立った。この課題に対して、問題文とその問題の間違った解答も書かれているワークシートを作成し、どの部分に誤答が見られるかを指摘させる取組を行う。この取組を通して、問題文や条件、解答などをじっくり読む過程を通して、飛ばし読みを防いでいく。</p> <p>英語では、自分の経験を英文にしたり、ペア・グループ活動を通して、自分の考えを伝えたり他者の考えを聞いたりする表現活動の機会を増やし、思考力・判断力・表現力を高める。</p>
第3学年	<p>【成果】 国語は全国平均+7.7 都平均+5 数学は全国平均+14.7 都平均+10 理科は本校がIRTスコア5131に対して全国平均全国平均503、都平均506であった。国語・数学は昨年度の点数と比較しても、点数は安定しており、生徒の学習が定着していることがわかる。一方、理科はほぼ全国平均・都平均と変わらない結果で、教科によって定着度にばらつきがある。</p> <p>【課題】 国語の正答率のグラフは、全国・東京都・本校ともに正規分布であるが、数学は全国と東京都は2カ所にピークがあり、本校は3カ所にピークがあり、点数が低い方のピークが二つに割れているように見える。全体での授業のねらいや、個々へのサポートの際における支援は、よく考えて行う必要がある。また、理科は国語・数学と比べて全国や都平均を大きく上回る状況ではないため、学校としてどの教科も学習する力をつけていくよう指導する必要がある。</p>	<p>教科による定着度の差を縮める。国語・数学で身に付いている学力を維持・向上させるとともに、理科を含めて全教科で基礎・基本を確実に定着させる。</p> <p>理科や社会は教科の特性として分野によって得意・不得意に大きく差が出るため、授業で学んだことを活用し、自分の課題を把握し、考えを説明したり、問題解決に生かしたりする力や理解度に応じた学習に主体的に取り組む力の伸長をはかる。</p>	<p>習熟度に応じた支援の充実を根幹とした学習指導をする。</p> <p>小テストや単元ごとの振り返りなどを活用して「できたこと」や「課題」を自分で整理させることで主体的に学ぶ姿勢の育成を図る。また、同時に理解度を把握し、個々に応じた課題を設定する。数学では現行の習熟度別少人数指導を継続し、基礎的内容の定着を図るグループと発展的内容に取り組むグループの両面から支援する。</p> <p>理科では実験結果の読み取りや用語理解を繰り返し確認し、基礎知識の定着を図る。</p> <p>言語活動の充実を図り、国語では根拠を明確にして説明する活動を取り入れたり、数学・理科では、考え方や解き方を言葉で説明する活動を増やし、活用力を伸ばす。</p> <p>特定教科だけでなく、どの教科でも「読む・考える・説明する」活動を取り入れる。</p>